

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H04435

研究課題名(和文) Confronting difficult past: Dark Tourism development in Japan:

研究課題名(英文) Confronting difficult past: Dark Tourism development in Japan

研究代表者

Sharpley Richard (Sharpley, Richard)

和歌山大学・国際観光学研究センター・客員教授

研究者番号：60863082

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本における観光と「困難な歴史」の関係、具体的には、集団的な国民的記憶に挑戦し、日本の国家的アイデンティティの現代的解釈と競合する、困難な、あるいは過去の暗い出来事に関連する場所が、観光においてどのように提示、表現、解釈されているか、そして、日本の観光政策にも示されている平和、相互理解、和解の強化に観光がどのように貢献できるかを考察した。これらは観光立国としての今後、観光活動の多様化、観光の社会的意義を検討する上で意義深い。成果は書籍 Confronting difficult pasts: Dark tourism development in Japanとしてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

困難な歴史の観光における解釈、表現、理解を検討することは、観光立国の将来に重要である。観光の広がりとともに、これまで政治、歴史、社会的に議論されなかった論争も注目されるため、その解釈の提示を検討することが重要である。観光を通じての国際相互理解の促進という日本が掲げる政策目的達成にもこれは重要である。さらに、太平洋戦争に関連した歴史も含め、困難な歴史を提示し解釈することは、特定の歴史が公式に記憶されることへの現代の議論を反映すると同時に、観光活動を通じての国家アイデンティティの創造に寄与することになる。さらに観光研究の社会的役割を示し、その責任を提言することは本研究の学術的社会的成果である。

研究成果の概要(英文)：This study explored the relationship between tourism and difficult history in Japan. Specifically, it considered how places associated with difficult or dark past events, which challenge collective national memory and compete with contemporary narratives of national identity, are presented and interpreted in tourism, and then how and to what extent tourism can thereby contribute to strengthening mutual understanding, peace building and reconciliation, as also specified in Japan's tourism policy. Such discussion is important considering the future of Tourism Nation, including diversification of tourism products, socio-cultural meaning of tourism, environmental impacts, also in light of the broader contemporary debates and issues surrounding tourism. It is also important role of research today, as the last generation in which living post-war memory can be recorded. Research outcome is currently being collated in a book: Confronting difficult pasts: Dark tourism development in Japan.

研究分野：観光学

キーワード：ダークツーリズム 社会的サステナビリティ 地域コミュニティー 困難な歴史 観光開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「観光は、平和が観光に依存するよりも、はるかに平和に依存している」(Hall, Timothy & Duval, 2004: 3)とされ、観光が国家内や国家間の平和、和解、相互理解を達成するための効果的な手段であると考えられてきた。具体的には、観光による社会的・文化的なつながりが対話と交流を促し、「文化の障壁を取り除き、寛容、相互理解、尊重の価値を促進する」(Rifai, 2013: 11)とされる。こうした価値を観光開発政策の具体的な目標として掲げている国もあり、日本の観光立国推進計画(2012年)の中でも「観光による「国際相互理解の増進」が目標として掲げている。

近年、困難な歴史や暗い歴史の現代的な意義が認められ、「肯定的で自己肯定的な現代的アイデンティティとの和解が困難である」(Macdonald, 2014: 1)歴史が、いかに困難な遺産や「痛みと恥の場所」(Logan & Reeves, 2009)として紹介・記念されるかについての学術的関心が高まってきている。特に、このような遺産の管理・解釈に注目が集まっており、政治的利害の介入や対立の結果としての証拠が強調されることも少なくない。しかし、観光という文脈の中で困難な歴史の分析を位置づけ、特に和解と理解を促す観光の潜在的な役割を探ろうとする試みはほとんど行われてこなかった。また、日本における観光に関する研究は増えているものの、文献は比較的限られており、困難な歴史を持つ場所への観光に関する研究は、主に広島・長崎と災害・地震からの復興が焦点となってきた。観光を通じて国際的な相互理解を図るという日本が掲げる目的の中で、観光とより多様な困難な歴史との関係を論じる試みは十分になされていない。

これを受け、本研究は、困難な歴史/困難な遺産と観光に関する研究に、特に日本における観光と困難な歴史の関係に貢献をする必要があると考えた。観光が一方では平和と理解のための積極的な力となり、他方では既存の緊張や誤解を強調する危険性も孕むことを明らかにすることにつながる。研究分野としては、観光学(ダークツーリズムを含む)、遺産学、平和学、現代日本研究にも新たな視点をもたらすと考えた。

2. 研究の目的

観光の規模や多様性、観光が行われる文脈の多様性から、平和と理解への貢献の可能性について一般化することはできない。しかし、「我々は誰であり、どんな価値観を保持しているかをめぐる根本的な意見の相違が表面化する時代」(Gross & Terra, 2018: 52)である今日、困難な(あるいは「暗い」)歴史に関連する場所への観光は特に、現在と未来のより平和な基盤として、訪問者の学習、理解、和解を促す機会として捉えられる。本研究は、観光と困難な歴史のこのような関係性を、日本の文脈で探求し、それによって観光が困難な歴史に対処するための潜在的な役割に関する知識と理解を深め、特に現代日本に関する観光研究に新たな貢献をすることを目的とした。

困難な歴史の観光による解釈、表現、理解を検討することの重要性は、3つの相互関係ある理由に基づく。まず、日本が特に国際観光(インバウンド)で急成長を遂げたため、国内の観光資源に重点を置き続けてきた。特にパンデミック後の急回復は、円安の影響もあり、各地域でオーバーツーリズムが懸念される結果となっている。有名な観光地がより多くの、より多様な観客を引きつけているだけでなく、観光の範囲が、政治的、社会的に微妙な歴史を秘めた、あまり知られていない他の観光地にも拡大しつつある。したがって、こうした歴史をめぐる論争が、観光を通じてどのように表面化し、どのように媒介される可能性があるかを検討することが不可欠である。第二に、多くの観光地とそれに関連する困難な歴史は、日本観光の主要な国際市場に関連している。したがって、観光を通じて国際的な相互理解を深めるという日本が掲げる目的を達成するためには、それらの解釈方法が重要である。そして第三に、太平洋戦争に関連した歴史も含め、(時間的に)より遠い困難な歴史と、より最近の出来事を提示し解釈する

ことは、特定の歴史が公式に記憶される方法をめぐる現代の緊張と議論を反映すると同時に、日本の多くの困難な歴史の場所で最大の観客を構成する国内の観光客のナショナル・アイデンティティーの創造に寄与することになる。特にこの点に関しては、戦後 80 年を迎える今、証言を直接聞くことができる最後の世代に生きる研究者として、その記録を残していくことは重要な責務であると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では日本における困難な歴史や暗い歴史に関連する観光地や観光地のケーススタディで構成される。各事例において、実証的な調査(現地視察やインタビュー)、文献調査の両方に基づき、特定の出来事や歴史が観光客に提示され、解釈される方法に注目した。現代の論争や議論と関連させながら、各地域が観光を通じて相互理解や平和、和解にどの程度積極的に貢献しているか、あるいは一方でどの程度負の側面を維持しているかについて結論を導き出すことを目標とした。

日本における観光と「困難な歴史」の関係を探求するにあたり、具体的には、集団的な国民的記憶に挑戦し、日本の国民的アイデンティティーの現代的な物語と競合する、困難な、あるいは過去の暗い出来事に関連する場所が、観光客にどのように提示され、解釈されるかを考察すること、それによって、日本の観光政策の目的である相互理解の強化に観光がどのように、どの程度貢献できるかを明らかにすることが必要であると考えた。具体的には、平和、理解、和解への貢献などを観光地の役割とし、戦争、災害、差別、弾圧、労働など、日本の歴史における困難な出来事や暗い出来事を選択し、現地において、資料収集、観察、インタビューを行うことで、その地においてどのように記録、表現、解釈されているかを記録し、それらの事例を取り巻く社会的議論を踏まえ検討した。

事例は、広島・長崎の平和記念資料館や特攻隊(神風・回天)関連施設の比較、毒ガスが製造された島(大久野島)、1944-5 年に英国人捕虜と朝鮮人労働者が働いた銅山跡(紀和)などの太平洋戦争に関連する有名・無名な場所や観光地、災害遺構(福島県大熊町)、産業遺産(軍艦島)、ハンセン病療養所、串本トルコ記念館、長崎の潜伏キリシタンに関連する遺跡にも注目した。現代の論争や議論と関連させながら、各地域が観光を通じて相互理解や平和、和解にどの程度積極的に貢献しているか、一方でどの程度負の側面を維持しているかについて結論づけた。

4. 研究成果

現在までの研究成果から、肯定的、否定的にかかわらず、対照的な解釈の形態や、理解や和解への貢献が明らかにされた。取り上げた事例は、日本における観光と困難な歴史との関係や、日本が特定の困難な歴史や出来事に直面する方法についての知識と理解に貢献するものとなった。研究成果は書籍「Confronting difficult pasts: dark tourism development in Japan」として、Routledge 社と契約が成立し、2026 年出版を予定している。

(書籍 Confronting difficult pasts: dark tourism development in Japan の概要、構成)

はじめに: 日本における観光と困難な歴史: 本章ではケーススタディの概念的な枠組みを提供すると同時に、日本における特定の困難な歴史にどのように向き合うかを文脈づける重要な問題、論争、議論を紹介することとする。具体的には、まず本書の大まかな文脈を理解することから始め、日本における観光、その歴史的発展、現代の規模と範囲について紹介し、平和と理解を促進する上で(日本の観光政策が)果たしうる役割を強調する。さらに、観光が平和に貢献するとされていることに言及し、観光を通じて相互理解と和解を確立するための実りある文脈となりうる「困難な歴史」(「困難な遺産」「暗い歴史」)の概念を紹介する。また、ダークツーリズムという概念についても言及する。ここでは、集合的な記憶や国家のアイデンティティーにとって困難な歴史が重要であることに注目し、そのような歴史を観光活動において提示し解釈することが、結果としてどのような影響を及ぼし、どのような課題をもたらすかを検討する。最後に、特に太平洋戦争に関連する、日本における歴史についてまとめる。

War 原爆: 広島・長崎 広島は日本の中でも人気の高い観光地で、平和公園を中心に年間約 1200 万人の観光客が訪れている。そのうち、2019 年に平和記念館を訪れた人は 175 万人(3 割近くが外国人観光客)。一方、長崎の原爆資料館は、Covid-19 の流行以前は毎年 60 万～70 万人の来館者があり、その立地やアクセス、世界初の原爆投下地としての広島の「知名度」が来館者数を制限していたことは間違いない。同様に、広島平和記念公園・原爆資料館における原爆の記念と解釈は、長崎のそれよりもはるかに多くの学術的関心を集めている。しかし、どちらも原爆の犠牲者を追悼し、平和のメッセージを伝えようとするものであり、このケーススタディで探るように、その方法はかなり異なっている。そこで、本事例では、現地視察や資料の分析に基づき、それぞれの施設が採用しているアプローチを比較し、国際理解にどの程度寄与しているかという点について結論を導き出す。

大久野島(広島県竹原市):現在この島は、ラビットアイランドとして知られるが、1927 年から太平洋戦争終結までは毒ガスを中心とした化学兵器の秘密生産地であった。現在も発電所跡などその痕跡が残るが、島での化学兵器の生産に関する説明は、小さな毒ガス資料館にのみある。この事例では、博物館やその他の解釈を通じて、この暗い過去と今日の「ソフト」イメージをどのように調和させる試みがなされているのかについて注目した。

回天の島: 大津島(山口県周南市):太平洋戦争末期、日本軍は進撃する米海軍に対して特攻隊という戦術を発動した。作戦は主に航空戦であり、日本の若い「神風」パイロットが派遣された。特攻隊員の慰霊碑は、鹿児島県の知覧特攻平和会館を中心に日本各地に建てられている。一方、有人魚雷(回天)も投入されたが、その成功率は神風攻撃に比べればはるかに低かったとされる。この事例では、神風と回天の隊員がどのように表現、記念され、その結果、これらの施設が平和と和解のメッセージをどのように推進するかに焦点を当てている。

紀和銅山の捕虜: 記念から和解へ: 旧紀和鉱山(三重県紀和町)1944 年、タイ・ビルマ(死)鉄道建設に従事していた約 300 人のイギリス兵役軍人が、三重県熊野市近くの紀和銅山に移送された。比較的待遇はよかったとされるが、16 人が終戦を待たずに死亡し、その遺骨は地域住民の手によって一つの大きな墓に移され、現在は英兵を偲ぶ名簿を含む記念碑となっている。同町の鉱山博物館に展示されている英戦争捕虜についても記録がある。本ケーススタディでは、幼少期から捕虜を記憶している地元の男性の証言も交えながら、40 年後に記念館を再び訪れた元捕虜たちが紀和町に戻ることで困難な歴史と向き合い、和解することで、日本での元捕虜の支援と和解を促す団体の設立につながったという、複雑なストーリーを詳述する。一方で、朝鮮人強制労働をめぐる日本での継続的な論争の証拠として、亡くなった鉱山労働者(朝鮮人)の墓地は記念館でも認識されないままであることも記述している。

沖縄: 戦時中の歴史と向き合う(那覇市平和祈念公園、ひめゆり平和祈念資料館) 沖縄は、そのビーチ、自然景観、独特の文化に魅了され、何百万人もの観光客が訪れる、日本で最も人気のある観光地の一つだ。沖縄県立平和祈念資料館にある「平和の礎」碑には、約 24 万 2 千人の名前が刻まれているが、うち約 15 万人が民間人であり、徴用されたのか、銃撃戦に巻き込まれたのか、自決を促されたのか、どのような形で命を落としたのか論争が絶えない。ここでは、沖縄戦がどのように記念されているか、特に、このような多数の民間人の死が、現代の訪問者にどのように解釈されているかを検討している。

国際理解のシンボル: トルコ記念館(和歌山県串本市) 和歌山県南端の串本にあるトルコ記念館は、1890 年 9 月にトルコのフリゲート艦エルトゥールル号が紀伊大島の岩場で遭難し、命を落とした多くの船員を追悼する施設です。多くの犠牲者の遺骨は、現場近くの墓地に埋葬されており、1930 年代には大きな記念碑が建てられた。1974 年に開館した記念館では、遭難の経緯や遺品が展示されているほか、遭難船の乗組員を救おうとした地元の人々の努力と日本の支援によって発展した、日本とトルコの国際

協力の歴史が紹介されている。この記念館は人気スポットであり、このケーススタディが考察するように、好奇心をそそるものではあるが(来館者は、記念館までの道のりでトルコの土産物屋に遭遇する)、悲惨な過去の出来事が、記念することによってポジティブな(相互理解の)結果をもたらすことがあることを明らかにした。

Hidden Christianity 隠れ・潜伏キリシタンの歴史(長崎市大浦天主堂、天草市崎津集落): 1549年、キリスト教宣教師として初めて来日したフランシスコ・ザビエルの活動を基に、後続の宣教師たちは特に長崎地方で一定の成功を収めたが、1614年にキリスト教禁止以降250年間、多くの「隠れキリシタン」達は、その信仰を地下に潜らせ、密かに信仰を続けることを余儀なくされた。日本では1871年に信教の自由が導入され、1863年の開港後、長崎に日本で最初の正規のカトリック教会が建てられた。現在、長崎周辺には、ビジターセンター、二十六殉教者記念館・記念碑など、隠れキリシタンに関連する施設が数多くあり、12箇所がユネスコ世界遺産に登録されている。ここでは、隠れキリシタンの物語に焦点を当て、それが長崎の歴史に不可欠で重要な要素としてどのように表現され、解釈されているか、また、それが日本における(宗教)観光と宗教的寛容をどの程度促しているかということに焦点を当てた。

Industrialisation 産業遺産軍艦島端島(長崎県長崎市、東京都新宿区若松、総務省別館産業遺産情報センター): 長崎から約15km離れた場所にある小さな島は、19世紀初頭の石炭発見の後、1887年から1974年まで海底炭鉱の中心地となり、労働者とその家族の居住地が島内に作られた。炭鉱の閉鎖後、特徴的な建物は放置され、その後荒廃していった。しかし、島の歴史や遺跡への関心から、2009年以降、観光ツアーが組まれるようになり、2015年にはユネスコ世界(産業)遺産に登録された。軍艦島は現在、日本の急速な工業化の成功を物語る人気の観光スポットであるが、国際的な(韓国)強制労働の使用疑惑などはツアーでは語られておらず、産業遺産情報センター(総務省)でも十分に対処されていない。この事例では、軍艦島の歴史と観光地としての役割をたどり、特に島における強制労働の困難な歴史をめぐる議論とその意味について考察した。

Disease & Discrimination ハンセン病療養所(岡山県瀬戸内市邑久町虫明長島愛生園、熊本県熊本市黒髪リデル・ライト記念館、東京都東村山市国立ハンセン病資料館): 1907年「癩予防に関する件」にて放浪患者の隔離、1931年隔離対象が拡大され、1953年には、「ハンセン病の蔓延を防止し、医療を提供し、ハンセン病患者の福祉を増進し、もって公衆衛生に寄与する」ことを原則とする「らい予防法」が制定された。しかし、実際には患者に対する非人道的な強制隔離と差別が継続された。1996年の法律廃止、さらに2001年元患者への補償を立法化、2019年には、家族を補償するための新しい法律が制定された。この事例では、ハンセン病患者に対する差別がどのように、なぜ起こったのか、現存する療養所や国立ハンセン病資料館での調査を通じて、その差別と向き合い、説明する方法を探ることを中心とした。

Disaster 災害復興: 東日本大震災 2011年3月11日午後2時46分、本州の東北地方太平洋沖でマグニチュード9の地震が発生した。40~60分後に大津波が沿岸500kmを襲い、2万人以上の命が奪われ、2000人以上の行方不明者が出ている。この津波によって福島第一原子力発電所(1F)はメルトダウンし、半径10km、20kmの住民は直ちに避難を余儀なくされた。一時的な避難と思いきや「帰還困難区域」に指定された1F周辺の地域は、汚染された瓦礫や土壌の「一時的な」保管場所として利用され、元住民にとっては長期的で、しかも終わりの見えない避難となった。本章では、失ったものの大きさは計り知れないが、土地や海とのつながりを取り戻し、生き直そうとする地域コミュニティが示す回復力に焦点を当て、すべてを失った沿岸住民による、化学物質を含まない藍染材料の生産、稲作儀式や伝統食品の継続、重要拠点のマッピングに関する語り部ツアーなどを紹介し、復興や希望の再構築における観光の役割を考察する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kato, K.
2. 発表標題 Regenerative tourism
3. 学会等名 Critical Tourism Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 久美 (Kato Kumi) (30511365)	和歌山大学・観光学部・教授 (14701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------